「日本画」絵具と材料について

日本画家　中尾　誠

「うりずん」（1996年）

現在の「日本画」と「洋画」は区別がつきにくいであろうと思われる程、その表現やモチーフも様々である。私も「日本画」をはじめて三十年程になるが、制作する作品はいわゆる「日本画」離れしたものである。

いわゆる日本画とは花鳥風月などを描いた装飾的、情緒的なものである。私の先生は花鳥画を得意とする人で、鶴や白鷺などの鳥や牡丹などの花をよく描いていた。私も当初教わるままにそれらを描いていたが、自分には他人事の様な気がしていた。その後、九州の炭鉱跡を描いたり、電車内の人々を描いたりしているうちに、どんどん原始的なものにひかれていった。

埴輪や土偶や古墳絵画などの原始美術に大きな魅力を感じ、日本画の材料こそ自分の表現したいイメージを伝えるのにふさわしいものだと悟り、基底材も紙からオガクズ（木工所等で出る木材の粉）をボンドで壁土状にしたものをパネルに塗布したものに描く様になった。ボンド（酢酸ビニル樹脂エマルジョン）は使用法によっては、ドーサ（後述）の役目をしてくれる。

下地が壁の様で堅牢な上、下塗りに使用する水干絵具等粒子の細かい絵具でも割れる事が少ない。これが紙だと温度湿度等により微妙に伸縮するため、微細な絵具を厚塗りすると必ず割れてくる。

長い三千本膠とサイコロ状の鹿膠

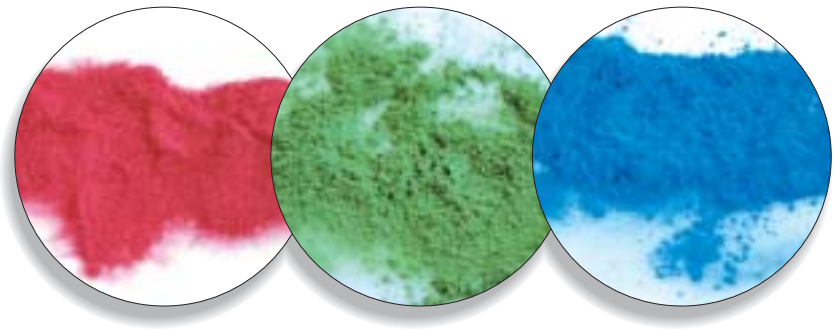
ただ表面の凸凹が激しいため、筆などがすぐに傷む事とデリケートな細かな表現には不向き。紙本作品の様に表装できない（はがせない）等デメリットも多くあるのは事実であるが、自分が二十代後半それまで関わっていた展覧会で巨大な油絵の作品に負けまいと創った技法だったのである。

私は絵画の修復と表具もやっている。自分のオリジナル作品にオガクズを使用する事は今もやっているが、表装されるのを前提に紙にごくうすく絵具をのせるだけの仕事も平行して行っている。

さて肝心な日本画絵具と材料について簡単な説明をしておきたい。

基本的に鉱物・植物・動物などを原料にしているが、天然顔料（岩絵具）の中で金を除けばもっとも高価なのが青「群青（ぐんじょう）」と緑「緑青（ろくしょう）」である。昔から貴重な絵具として使用されてきた。これらは銅の鉱石から造られたものである。

「群青」の主成分は塩基性炭酸銅、原石は藍銅鉱。日本ではほとんどとれず中国やチベット産で



辰砂（8番）　緑青（白）　群青（白）

「風の日」（1996年）

あることが多い様である。「緑青」の原石はマラカイト（孔雀石）で、やはり塩基性炭酸銅二水塩で、これらはほとんど宝石に近いものであり、それを粉砕し精製する天然岩絵具が高価になるのは当然なのである。又、天然のウルトラマリンブルーは貴石ラピスラズリから造ったものである。

赤色系では「辰砂（しんしゃ）」、硫化水銀鉱物から造られ天然の朱で最も貴重な赤色顔料である。古墳の棺の中に辰砂が塗られていたこともあり、古くから使われていた様である。

白は「胡粉（ごふん）」、ジャパン・ホワイトとも呼ばれる。牡蠣の殻を風化させ砕いたものを精製して造られる。主成分は石灰質。

天然の顔料の代表的なものを述べてみたが、これらの絵具は胡粉を除き全て3番～15番という様に粒子分けされている。数が多い程粒子が細かく色相も淡く（明るく）なる。最も微粒子のものを白（びゃく）という。

同じ群青一つとっても3番は藍色に近い濃いザラザラ状から、白となると水色コナコナ状になる。他の色についても同様の為、用途によって使い分けする。

又天然岩絵具は焼く事で変色させることができる。熱を加える事により、主成分の違いで様々に変化し、色数を増やす事ができる。フライパンでゆっくり加熱し、攪拌する。火が強すぎると炭化してしまう。水銀を含む辰砂は人体に危険な為焼かない。

日本画の絵具は他に水干絵具（泥絵具）や新岩絵具、合成岩絵具など人工的に作った絵具がある。基底材である紙や絹にこれらの顔料は膠で溶いて描くのであるが、あらかじめ基底材である紙等に「ドーサ引き」をしなければせっかくの高価な絵具も付いてくれないのである。

ドーサ（礬水）とは膠と生明礬（硫酸アルミニウムカリウム）との混合液でにじみ止めとしての定着層をつくりだすもので、比重の重い岩絵具を画面に永く定着させておく為必要なものである。（ごく薄く描く水墨画等には必要ない）。又金銀箔の変色を防ぐためにも塗布して使われる。（酸化防止の役目もする）。

重い絵具を定着させるドーサ液は強く使うと基底材である紙や絹に悪影響するし、弱すぎれば絵具は落ちてしまう。使用する紙の厚さや強さによって濃度を変えなければならないし、絵具によっても膠の濃度は違ってくる。素材の持ち味を生かして使用していくのは難しいが面白い。

景気が上向いてきたと言っても美術界や絵具屋さん、紙屋さん、筆屋さん等は未だ冬が終わらない現状である。日本画の岩絵具一つとっても職人の手作りの産物で大変な工程を経て作られたもので、世界で唯一のものである。原石産出国の中国でも安価なものが最近作られているが、超音波粉砕で作っていて粒子も不揃いな上ホコリが多く、仕上げには使用できないのが現状だ。丁寧でこだわりを持つ日本の職人達がまっとうにやって行ける時が本当にこの国が豊かさを取り戻す時ではないかと思っている。

日本画家
中尾　誠

1955年福岡県生まれ、東京デザイナー学院卒業。
日本画家・藤島博文氏に師事。
湯島・羽黒洞にて古画修復勤務。
青枢会元委員、個展・グループ展多数
現在無所属。